

浜松文芸館だより

No.36

公益財団法人 浜松市文化振興財団

いざない

発行 浜松文芸館(文責:溝口)

企画展

7月25日(土)～10月25日(日)

スズキコージの絵本原画と

浜松の手づくり絵本展



浜松市出身の画家・絵本作家、スズキコージ氏の描いた数多くの作品の中から、『まざあ・ぐうす』『クリスマス プレゼント』等の原画と絵本を中心に展示しました。

彼の創造する、豊かな想像力に溢れた独特の世界は、子どもたちばかりでなく、大人のファンの心をも惹きつけて止みません。本展をとおして、多くの皆様にスズキコージ氏の作品の素晴らしさを味わっていただけたら幸いです。

同時に、浜松絵本クラブ「チャイルドママ」の皆様の手づくり絵本、文芸館の「絵本づくり講座」の中から生まれた「世界に一つだけの絵本」も紹介しています。



『夏休み絵本づくり講座』開催 *****



夏休みに入り、毎日暑い日が続いています。文芸館では、子どもたちの「夏休みの楽しい思い出の一つ」にしてもらおうと、今年も『絵本づくり講座』を開催しました。

参加した子どもたちは、講師の井口恭子さん(浜松絵本クラブ・チャイルドママ代表)と一緒に、牛乳パックを使った「からくり絵本」づくりに取り組み、素敵な作品を仕上げました。

井上靖と浜松 13

3度にわたる「天竜川の旅」

井上靖が天竜川の流れを見るために初めて飯田線に乗ったのは、昭和28年3月であった。武田信玄のことを書くためであった。遠州へ進攻する場合、信玄はほとんど甲斐から信濃へ出て伊那谷を下って行った。靖は、信州の始発駅辰野から飯田線に乗る際、自動車で諏訪湖を一まわりし、天竜川の流出口にある釜口水門管理所を訪問している。その窓から対岸に雪を戴いた八ヶ岳連峰が美しく見えた。

天竜峡から中部天竜までの二時間は、ずっと曲がりくねった天竜川の流れが電車の窓から見下ろせた。風景は正に絶佳である。この間は川の兩岸は切り立った絶壁をなし、其中腹のところどころに、十軒二十軒の小さな家が危なっかしく建てられている。早春とはいえ、三月も初めのこととて、伊那の溪谷は、その山の色も、天竜の青黒い流れも、まだ深々と冬の中に眠り込んでいる感じであった。

ただ、ところどころに点々と見える梅の白い花だけがわずかに春を呼んでいた。（「天竜川の旅」）

その夜靖は、天竜峡に一泊した。翌朝、「旅館で朝食に出された山ゴボウの味だけは今も忘れないでいる」と記している。

飯田線は辰野から天竜峡までと、佐久間の中部天竜から豊橋までは川に沿っていない。そのため靖は、昭和30年と31年の共に3月下旬、浜松から自動車で三方ヶ原を突っ切って二俣へ出て、天竜川を溯っている。佐久間ダムの工事現場で働く設計技師を主人公にした小説、「満ちて来る潮」の取材のためであった。30年に出かけた時は桜が満開であったが、翌年は気候の関係で満開には1週間ほど間があった。

船明^{ふなびら}付近から佐久間までの川沿いの道には現在船明ダムと秋葉ダムができ、拡張された舗装道路が飯田まで続いている。しかし、当時の様子を知る人がめっきり減ってしまった。靖のこの文章は、当時の様子を知る貴重な記録となっている。

（船明付近は、）対岸に破竹の藪が多く、麦の青と菜の黄がだんだら模様を作っている田圃が続いている。やがて溪谷はせまくなり道路は丘陵の裾ばかりを通るようになる。道路には一間間隔ぐらいに桜樹が植わっている。最初の時、満開の花のトンネルの中を一時間ドライブしたことはちょっと忘れられぬ豪華な思い出である。（略）（横山橋を渡ると）杉林が多く、丘陵の斜面のところどころに土蔵造りの家が点々と見えてくる。道端の農家はどこも申し合わせたように背戸に夏蜜柑の木を持っているのが見受けられる。竜山村へはいると、とたんに秋葉ダムの工事場に近い空気が濃厚になって来た。道路を労務者が歩き、丘陵には飯場が見え出す。やがて工事場を過ぎる。道端から見ると工事場はさながら戦場である。（略）川瀬の音はきこえず、凄まじい機械音があたりを埋めている。

ここから自動車はやがて湖底になる道路を走る。家々は大部分が移転し、まだ何軒かが残っている。

佐久間ダムの工事現場はここからさらに30分の距離にある。

30年の時は、自然が收拾つかないまでに傍若無人に破壊されている感じだったが、1年後には破壊されたものが整理され、何かが建設されようとしている感じであったという。3か月後の31年6月発行の角川写真文庫『天竜川』に発表したものである。